

孤高の歌人
明石海人ものがたり



目次

歌集『白描』について	2
歌集『白描』序文	3
ハンセン病と「らい菌」のこと	4
漫画「明石海人ものがたり」	5 ~ 32
明石海人略年譜	33
沼商同窓会明石海人の会事業	34
校内短歌コンクール短歌優秀作品	
国立療養所「長島愛生園」	35
あとがき	36



千本松原の歌碑



沼商校内の歌碑

歌集『白描』について

明石海人研究家 岡野久代

昭和十四年二月、「白描(はくびょう)」という表題の歌集は、空前のベストセラーになったと言われています。著者は国立癩療養所長島愛生園(ハンセン病患者を隔離する施設)に收容された無名の歌人でした。筆名を明石海人と号し、すでにハンセン病による壮絶な闘病生活を送っていました。

この歌集は主に園内の機関誌「愛生」と、外部結社の「水甕(みずがめ)」や「日本歌人」に登載された歌を吟味し、推敲し、構成して、一冊の歌集にしたものです。唯一の歌集ですから、家族への思い、ふるさとへの郷愁、闘病生活の苦悩など、明石海人の生涯の心のひだが克明に綴られています。

表題の白描は、海人が若い頃、墨絵の名手だったので「白描画(墨絵の線描画)から命名したのでしょう。



歌集『白描』

わが国の伝統的な短詩型文学の短歌は、病む人にとって創作に要する体力の消耗が少ないこと、また人生を観照する上で最適な文学であったのです。

歌集『白描』序文

明石海人

癩は天刑である。

加はる筈（たがへし）の一つ一つに、嗚咽し慟哭しあるひは
呻吟しながら、私は苦患の間をかき搜って一縷
の光を渴き求めた。

— 深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えな
ければ何處にも光はない— さう感じ得たのは病
がすでに膏盲に入ってからであつた。

齡三十を超えて短歌を學び、あらためて己れ
を見、人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲
む大地の如何に美しく、また厳しいかを身を
もって感じ、積年の苦澁をその一首一首に放射
して時には流涕し時には抃舞しながら、肉身に
生きる己れを祝福した。

人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて
愛を信じ、明を失つては内にひらく青山白雲を
も見た。

癩はまた天啓でもあつた。

原典より

言葉の読みと意味

- 白描（はくびょう）… 墨の線描画である「白描画」から命名
癩（らい）… ハンセン病 感染症の一種
天刑（てんけい）… 天（神）が下す刑罰
筈（しもと）… 罪人を打つ竹製の棒
嗚咽（おえつ）… 声を詰まらせ泣くこと
慟哭（どうこく）… 悲しんで大声をあげて泣くこと
呻吟（しんぎん）… 苦しみうめくこと
苦患（くげん）… 苦しみや悩み・仏語
一縷（いちる）… 一本の糸のように細いもの
何處（いづく）… どの場所・部分・どのような程度・段階（處は処の旧字）
膏盲（こうこう）… 病が手の施しようがなくなるまで進んだ状態
苦澁（くじゅう）… 苦しみ悩むこと・澁は渋の旧字
流涕（りゅうてい）… 涙を流し激しく泣くこと
抃舞（べんぶ）… 手を打って舞い喜びを表すこと
天啓（てんけい）… 天（神）のみちびき

ハンセン病と「らい菌」のこと

明石海人 研究者 岡野久代

有史以来、人や動物のからだは、ほとんどが肉眼で見えない微生物(菌・ウイルスなど)と共存し、通常はふつうに暮らしている。しかし、病原体となる微生物がからだに侵入すると、それらの増殖によって疾患が生じる。この状態を感染症による病気といっている。

ハンセン病は「らい菌」による感染症である。この菌は伝染力が弱く、潜伏期間はかなり長いとされる。しかし、特効薬のない時代、疾患の症状が進むと悲惨であった。末梢神経を侵され(感じない)、失明(見えないう)、気管狭窄(息ができない)の三重苦だからである。それに風評と迷妄から偏見と差別にさらされた長い歴史がある。

ノルウエーのアルマウエル・ハンセン博士が「らい菌」を発見して以来、ハンセン病の研究や医療のもとにいまや治療可能な感染症となったが、『らい菌』は地球上から消滅したわけではない。それは新型コロナウイルスが証明している。



愛生資料館内の展示コーナー(ハンセン病とは)

漫画「明石海人ものがたり」

登場人物紹介

明石海人(野田勝太郎)



幼少時代



沼商時代



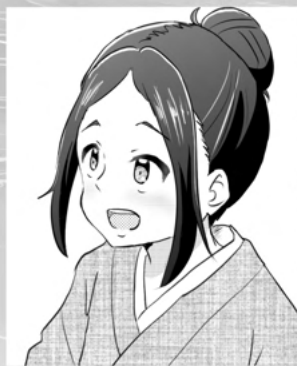
教員時代



歌人時代



勝太郎の両親



勝太郎の妻



大正十五年
春
東大病院



せ、先生…
なにか重い病気
なのですか…？



皮膚科



……



らい病じゃな…

医師から病名を告げられた時
やり場のない憤りがこみ上げてきた

介添えの看護師の
慰めも聞こえない
状態であった

と同時に頭の中で様々な言葉が
駆け巡った

不治の病
なんで俺が
偏見
差別

親兄弟はもとより親族に
及ぶであろう今後の世間
からの扱いを考えると
身の置き場も無くなる
思いであった

この非情なる病の宣告を
どのように家族に告げよう
と思いつながら帰路についた

地元の駅

ただいま

お帰りなさい
どうでしたか？



こうして

私の十三年に亘る

苦悩の日々が

始まったのである



千本浜は地域の浜っ子たちの
恰好の遊び場だった

北には霊峰富士、南は千本松原と
駿河湾が広がる風光明媚なところで



私の名は
野田勝太郎

生家は駿東郡片浜村

家の前は砂利道の東海道
が通り、時折荷車が
走る長閑な村であった

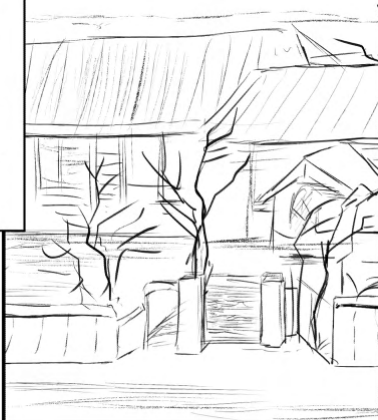
家族は父と母
兄二人と弟妹が
一人ずつの7人家族

厳格な父と
優しい母の懐に包まれて
なに不自由なく
穏やかに暮らしていた



当時、尋常高等小学校卒業が
一般的だった中で、私は兄二人を追って
難関の沼津町立商業学校(沼商)
へと進学した

勉学に励み墨画や文学にも
傾倒していった



予科2年、本科3年
通算5年間学び
静岡師範へ進学した

小学校の教員教育を受け
大正9年3月、私は静岡師範学校を
卒業し、同時に小学校正教員の
免許状を授与された

時に二十歳、いよいよ教員として
子供たちの前に立つことへの
期待と不安が入りまじった









明けて昭和2年、
明石の楽生病院へ
すがる思いで入院を決意した

出発の日の早朝、父母に声をかけ
人目を避けるように
妻子とともに駅に向かった

車中の人となった私は
車窓から身を
乗り出すように手を振り

別れの寂寥感から
人目を憚ることもなく
妻子の名を呼び涙じた

ガ
ゴ
ト
ン



結局、楽生病院では、思うような
治療効果はなく和歌山粉河にある
佐野病院へと通院する

半年が過ぎ秋になって
妻が次女を連れて
見舞いに来て

これからの生活の
話を聞かせてもらった



これでもう会うことも
無かろう

家族との最後の時間を
噛みしめた……



楽生園が経営難に
陥ってる時

国立のハンセン病療養所
第一号が出来たので
そこに移送されること
になった

長島愛生園である





クソ！
俺にこの
病を染したのは
どこのどいつだ！

俺の名前は野田勝太郎
召津生まれ
文句あつかい
名前を返せ！
俺を返せ！

おれをかえせ



俺をここから
だせ！！

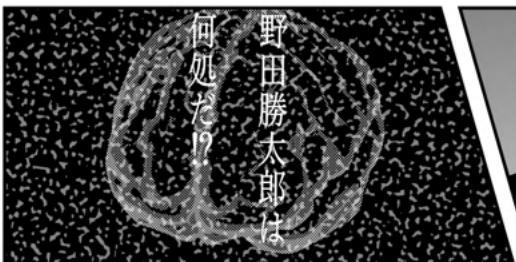
今すぐ
沼津に帰せ！！



来るなー！！
オレに近づくな！！

危ない！
危ない！！
危ない！！

雷が響く
雷が響く



野田勝太郎は
何処だ？



ああ……
あくげのはながさいている……
母さん……
かあさん……

たにしま
さうだ 明日は
こどもたちを逢おう！

これか……



私は不治の病に
抗いながらも

その絶望から



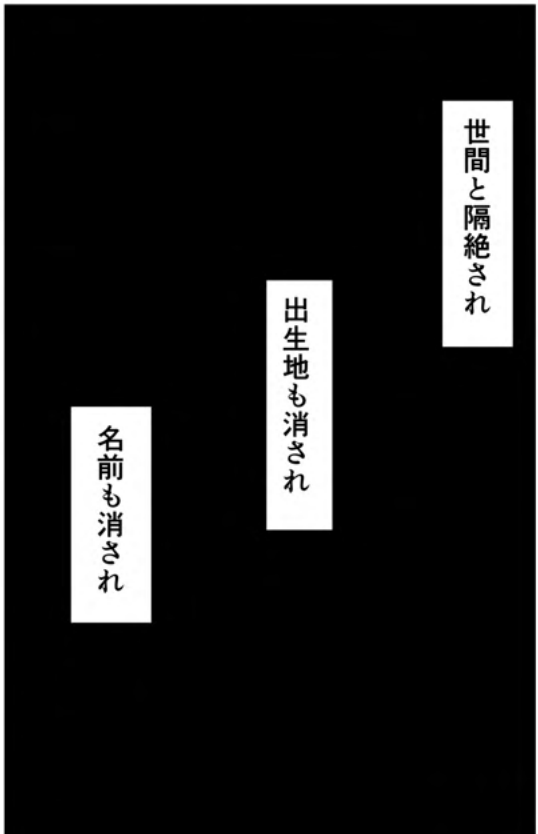
うあああああああああ!!!



茫然自失、
精神錯乱に
陥った



天涯孤独の身となった



世間と隔絶され

出生地も消され

名前も消され





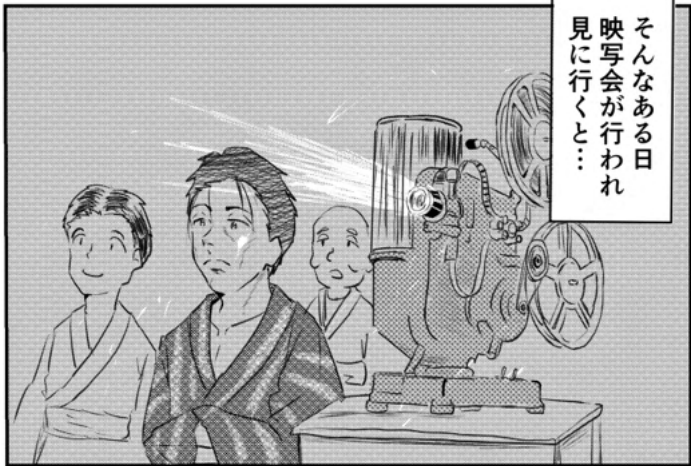
愛生園には
詩、俳句、短歌、散文など
多くの入園者らの
作品が載せられた
文化的機関誌『愛生』
があった



ここで短歌に出会い



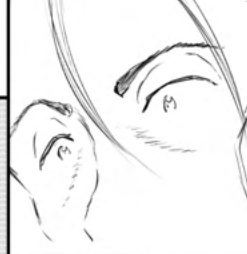
ほとぼしるように
作歌に没頭してゆく
ことになる



そんなある日
映画会が行われ
見に行くこと…



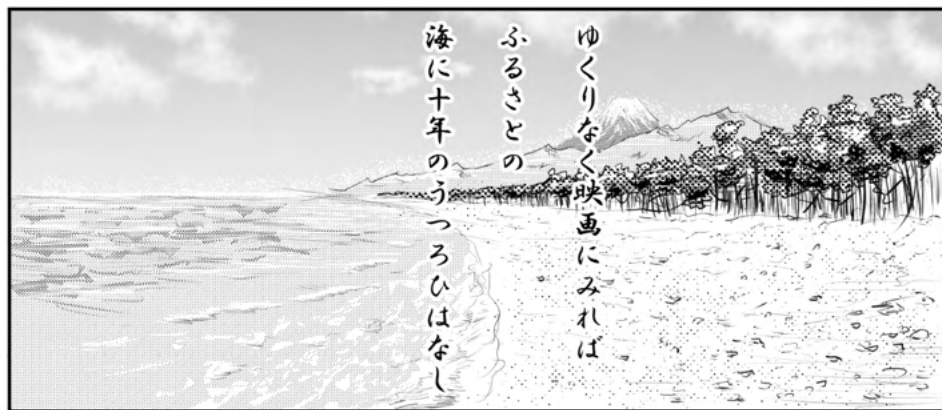
こうして
文学に
目覚めたのだ…



千本浜が
映し出されていた…



そこには
我が故郷



ゆくりなく映画にみれば
ふるさとの
海に十年のうつろひはなし



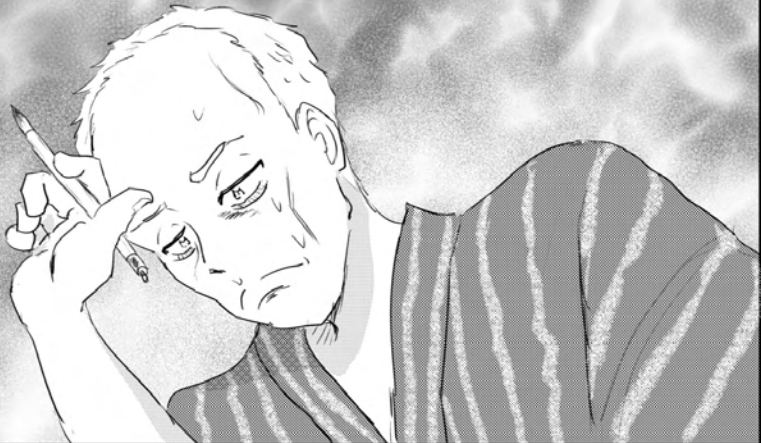
園内の同人誌『愛生』へ
投稿するべく詩歌の
創作に勤しんだ



明けて昭和9年

身体は日を追う毎に
侵されていく

雅号を
明石大三、目白四郎など
あれこれ思案する



明石に…



私の近くには
いつも海があった…

故郷に…



ここ長島にも…



私は
雅号を

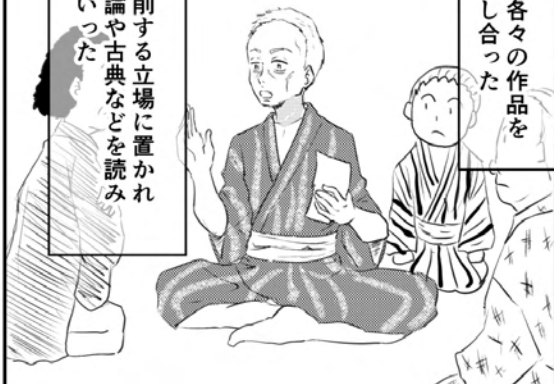
明石海人
と決めた

明石海人



園では作者が各々の作品を
持ち寄り批評し合った

やがて私は添削する立場に置かれ
先人たちの俳論や古典などを読み
研究を続けていった



だが、病は確実に神経を侵し
発熱を伴うようになり

こう……

思うように
筆は進まなかった

……
時間……
あと……
10年の時間があれば……

いや……
この残された時間を……

新たな出発点と
捉えよう

深海のように
何の光もない場所に

一筋の光が
灯るとすれば

それは自らが
光らなければならぬ

生きることへの
感謝こそ幸せだ

この世界で
“今”を生きている

この世界は
美しい彩りで
満ちている

残された時間
その時がくるまで

私の人生を
精一杯詠おう



一年後：
前衛的な歌壇誌
『日本歌人』に
短歌を投稿し
多数掲載された



これが高い評価を受け
いちやく文学界の注目を
集める存在になった

視力が落ちてきて
診察をしてもらったが

このままでは
じきに失明して
しまうわね…

手の施しようが
無い状態であった

そして病状はさらに悪化し
高熱による昏睡に襲われ

この年の秋には遂に
視力を奪われてしまった



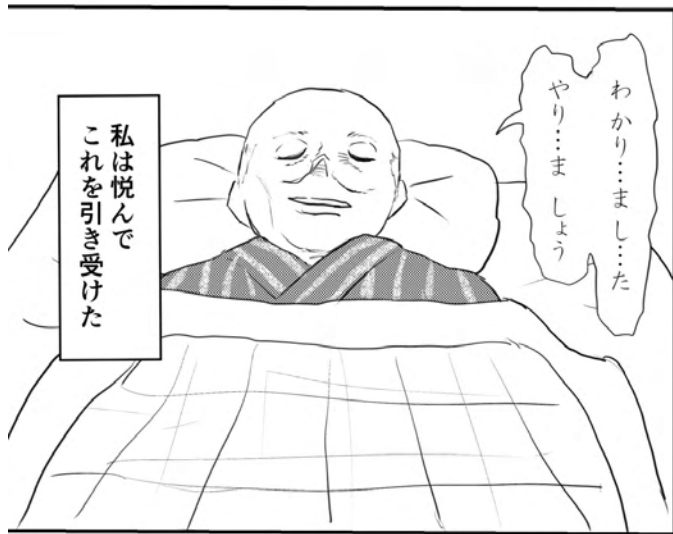


この頃、改造社が
歌集の出版を
提案してきた



口述や空中に文字を書く
などして療友の手を借りて
創作活動を続けた

それでも創作意欲は
衰えることなく



私は悦んで
これを引き受けた

わかり…ま…した
やり…ま…しょう



歌…集…？



是非
出しましょう！

はい！



気管狭窄に陥り
このままでは死んでしまうと
切開手術を行った



海人さん！

こっ…こっ…こっ…

うー！

手術は無事に済み
なんとか息を吹き返した

歌集出版を完成させねばならぬと
序文を手掛け

暮れには最終原稿を
完成させ、ようやく
終えたのだった



翌年2月
歌集『白描』は出版された

白描
明石海人歌集

予想を越える売れ行きとなり
当時のベストセラーとなった



出版しました！

喜びの涙を
流したのであった



私は『白描』を
手に取り

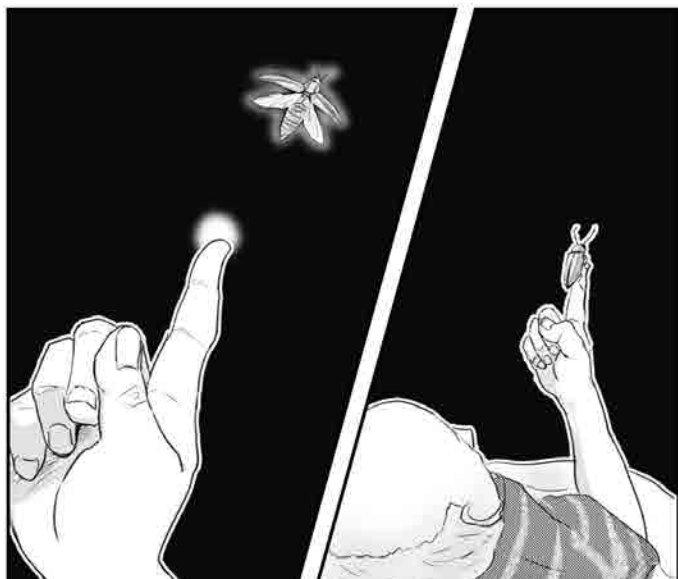


『白描』出版後の病状はさらに悪化し、
検査の結果は結核であった
起き上がることさえ適わず、
光田健輔園長の献本式は
療友の代行となってしまうた



多額の印税が届き、まずは長年の
不幸を償うべく、故郷の母に送り、
長島短歌会「愛生」のために使う
計らいをした

六月九日二十一時過ぎ
終にその日が来た：

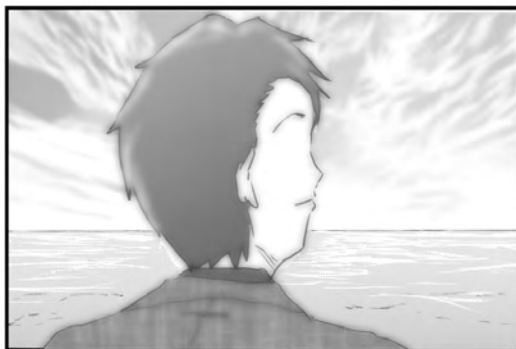
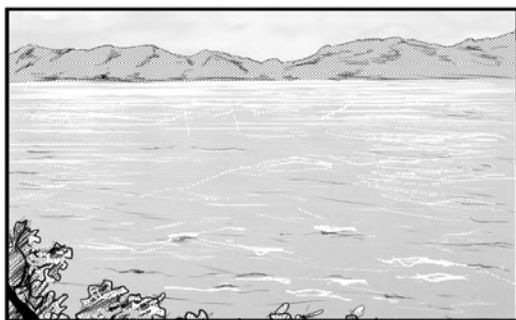
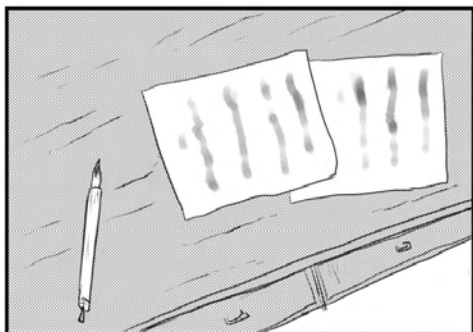


昭和十四年六月九日
孤高の歌人 明石海人
結核にて病死



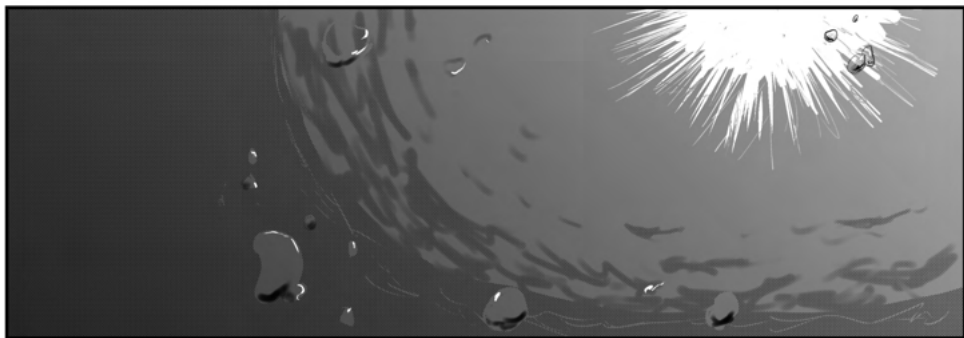
三十七年の生涯を閉じる

大勢の療友らが遺体を囲んで
一夜を明かし、翌日には
多くの友人や職員が駆け付けて
その死を悼んだ



海人のお骨は
愛生園内の納骨堂と
沼津市内の墓地に
分骨された





らしいは
天刑である

深海に生きる魚族のやうに

自らが燃えを付けば

何処にも光はない

さう感じ得たのは

病がすでに

膏肓に入ってからであった

人の世を脱れて

人の世を知り

骨肉と離れて愛を信じて

明を失ってほ

肉にひらく

青山白雲をも見た

らいはまた天啓でもあった

明石海人略年譜 (岡野久代作成)

- 明治三十四年(一九〇一) 本名野田勝太郎 七月五日 静岡県沼津市生まれ
 明治四〇年(一九〇七) 七歳 片浜村立片浜尋常小学校入学 現・沼津市立片浜小学校
 大正二年(一九一三) 一三歳 沼津町立商業学校に入学 現・県立沼津商業高等学校
 大正七年(一九一八) 一八歳 静岡師範学校に入学 現・静岡大学
 大正九年(一九二〇) 二〇歳 駿東郡原尋常高等小学校の教員に採用される
 大正一〇年(一九二二) 富士郡伝法尋常高等小学校に転勤
 大正一二年(一九二三) 富士郡須津尋常高等小学校に転勤
 大正一三年(一九二四) 二四歳 結婚
 大正一四年(一九二五) 二月、長女誕生 富士郡富士根尋常高等小学校に転勤
 昭和元年(一九二六) 初春、東京帝国大学医学部付属病院にてハンセン病の診断を受け退職
 秋、次女誕生
 昭和二年(一九二七) 家族と別れ、兵庫県明石市の明石薬生病院に入院
 昭和三年(一九二八) 次女病死(享年二歳)
 昭和四年(一九二九) 明石薬生病院に再入院 帰郷
 昭和六年(一九三一) 明石薬生病院に三度目の入院
 昭和七年(一九三二) 十月不明の高熱のあとと精神錯乱
 明石薬生病院閉鎖(十一月)
 人事不省のまま国立癩療養所長島愛生園に收容される。
 精神鎖乱状態を経て諦念の境地に向かう 父死去
 三四歳 長島愛生園機関誌「愛生」に詩歌発表
 「水齋」から「日本歌人」に転社
 「短歌研究」、「日本詩壇」、「日本歌人」に詩歌発表
 「日本歌人」にて将来を嘱望される 秋 失明
 『新万葉集』(改造社)に掲載され脚光を浴びる
 気管狭窄のため気管切開、発声困難となる
 三八歳 二月、歌集『白描』(改造社)が出版されベストセラーとなる
 六月九日、結核にて死去
 長島愛生園の内田守医師が遺骨を母に届ける



長島愛生園で晩年を迎えた海人

小学校教員時代の海人

「沼商」三年生の頃

沼商同窓会明石海人の会事業

会では、毎年6月新一年生に授業の一環として「明石海人の講演」を実施しています。ハンセン病という、当時は絶望的な病に侵されても、なお強く生き、短歌の道を究めた海人の生き方に共感を覚える生徒も多く、海人を見做い自身の生き方の一助とする覚悟を胸に秘めると云う感想が多く見られます。

また、全校生徒対象に、毎年短歌コンクールを実施し、同窓会が審査にも関わり、入選を決定しています。毎年、生徒たちにより、日頃の生活や、時代や流行に関連した、素晴らしい作品が生まれています。他にも、海人の歌碑や墓参と共に清掃活動を実施しています。今後、同窓会として、行政や学校と連携し活動してまいります。



明石海人の講演授業の様子

令和四年度 明石海人

短歌コンクール短歌優秀作品

最優秀賞 三年一組 工藤 璃央

亡き母のまぶしい笑顔思い出し
この先ずっと歩いていこう

優秀賞 三年三組 田中 ゆら

月明り見上げて歩く「明日こそ」
溢れる涙こぼさぬように

優秀賞 二年五組 小川 陽花

薄明り幼い頃はまだ知らぬ
友という名のまぶしい光

優秀賞 一年三組 西島 真子

やってるかやさしくそとつみこむ
蛍になってやってきた祖父

国立癩療養所「長島愛生園」

海人が創造的に晩年の生涯を生き抜いた岡山県瀬戸内市にある元国立癩療養所「長島愛生園」。歴史回廊をたどってみると、その島には「収容棧橋」「収容所」「監房」「目白寮跡」「納骨堂」と、現在でもその姿を残している。

「長島愛生園」は昭和5年、日本初の国立癩療養所として誕生した。現在でも残る「管理棟（現在は歴史館）」は日本のハンセン病を語る上でも重要な役割を果たした場所であり歴史的な建造物とも言われている。当時ハンセン病は有効な治療法がなく、国の政策で療養所への強制的な隔離が行われた。



隔離の島 長島愛生園



愛生園内にある海人歌碑



収容所(回春療)



愛生資料館



収容棧橋

あとがき

この時代だからこそ知っておいていただきたいこと、伝えておきたいことがあります。

今回の、『孤高の歌人―明石海人ものがたり』は、沼商の先輩明石海人（野田勝太郎さん）の生涯を漫画にして多くの皆さんにお伝えすることを目的に作成いたしました。

そして、もう一つの目的として、現代流行している新型コロナウイルス感染症拡大の状況を踏まえ、ハンセン病という病にかかりながらも、日本の大歌人として名を遺した明石海人の生涯から我々が学ばなければいけないことがあるのではないかと計画を進めてまいりました。

今後、同窓会といたしましても、現在行われております講演授業、校内短歌コンクール審査、墓参活動など継続してまいります所存でございます。

この冊子作成にあたり、ご協力とご教授いただきました皆様に厚く感謝申し上げます。中でも、計画段階より、委員会と共に冊子の構成から、今まで研究されてこられた情報を基に、執筆のご協力までしてくださいました監修の岡野久代先生、漫画作成にご協力いただきましたひらのとーる氏には、心より感謝申し上げます。

そして、最後に、企画編集から、執筆を進めてきた沼商同窓会明石海人の会委員会の皆さん、本当にお疲れさまでした。この冊子が、沼津商業高等学校生徒の皆さん、学校関係者の皆さん、同窓会の皆さんにご愛読いただき、受け継がれていくことを願っております。

静岡県立沼津商業高等学校同窓会

会長 芹沢俊夫

「孤高の歌人―明石海人ものがたり」2023年5月

編集・発行	: 静岡県立沼津商業高等学校同窓会 明石海人の会
表紙画・漫画・編集協力	: ひらのとーる
表紙書体	: 佐藤愛桜(2年) 根本那菜果(2年)
裏表紙画	: 石橋樹(3年)
裏表紙写真	: 右から 石原一義校長 芹沢俊夫同窓会会長 乗末亮太生徒会会長(2年) 府川結副会長(2年) 一杉紗優妃書記(2年) 名倉結会計(2年)
目次頁写真左	: 左から 土屋由理(3年) 古木慶吾(3年) 河野聖弥(3年)
目次頁写真右	: 左から 橋本唯花(3年) 石橋樹(3年)
印刷	: (有) 竜南印刷
監修	: 明石海人研究家 岡野久代 博士(国際関係)

